

青森県立郷土館整備検討会議（第3回）

日時：令和7年7月25日（金）

10:00～12:00

場所：青森県庁北棟7階 709会議室

（出席者）

工藤 清泰議長、澁谷 悠子委員、葉山 茂委員、半田 昌之委員、
川守田 礼子委員、高坂 幹委員、西川 智香子委員、佐々木 遊委員、
小山田 文泰委員、竹中 恵理委員、遠藤 章子氏、奈良岡 隆樹氏

1 開会

2 県立郷土館の役割について

（1）県説明

県から、資料2（1～11ページ）により説明した。

（2）意見交換（→：県回答部分）

委員から、次のような意見があった。

- 他館事例の展示内容は理解できたが、その展示の背景やどのような思想で選定されているのかを知らないと、これがどういうものなのか判断しにくいと思う。
このため、コンセプトやテーマなどと併せて説明してほしい。

→ 各館によって、展示の目玉や、その背景を把握していない場合もあるのでこの場での説明が難しい。

- 他館の特徴を説明する中で、委員から、展示とそのバックボーンにあるコンセプトのつながりは何かと質問があったが、その点について詳しく聞きたい。特に、三重県総合博物館や滋賀県立琵琶湖博物館は参考になると思う。三重県総合博物館は、三重構造で、外側に自然史、それによって形づくられた人間の歴史、生業や食文化、祭礼があり、そのさらに真ん中に信仰があるという説明であったが、おそらく青森県も同様の考え方なのではないか。

また、滋賀県立琵琶湖博物館は、建物と湖が連動しているので、博物館を建築物単体で捉えるのではなくて、周りの様々な自然や遺跡、お祭りなどと連動させて、いわゆるフィールドミュージアム的なコンセプトだと思う。

この2館について何か情報があれば教えてほしい。

→ 三重県総合博物館は、コンセプトが「ともに考え、活動し、成長する博物館」をコンセプトにしているとのこと。このコンセプトと三重構造の展示がどうつながっているかについては把握していない。

滋賀県立琵琶湖博物館は、コンセプトは「湖と人間」ということで、固定された水族館のプールではなく、琵琶湖と隣接した博物館から水鳥が観察できるなど、湖全体が展示室になっていると認識している。

また、琵琶湖の食物連鎖の頂点に立つ大きなナマズがその目玉となっているということで、ここはまさにコンセプトと展示が分かりやすく説明されていると捉えている。

- 三重県総合博物館については、館内で三重構造の発想に至るまでかなりの時間を費やしていると聞いている。その費やした議論の中核にあったのは、館長を筆頭にした学芸員を中心とする協議体であり、自分たちの博物館がどのような博物館になればよいか、どうすればよい博物館になれるのかといった議論を積み上げた年月が、新しい展示の形になっている。

館内での議論の積み重ねが形になるので、先進事例に近い形でやっても失敗した例もある。なぜ失敗したかという、結局は学芸員同士のコミュニケーション不足であり、分野毎のスペース取りで終わり、テーマ同士の関連性、一つのエリアの文化、自然をどういうストーリーで県民に見せていけばよいかの議論がなされないからである。

コレクションを知っている学芸員が、自分たちの持っている県の宝をどのように組み立てていけばよいのかといったストーリー作りを県立郷土館の中で、仕事を振り返り、棚卸しをして、自己点検をし、その素案を出すところから始めないと、ビジョンから具体的な手法へ議論を進めるのが難しい。

また、県教育委員会で策定している文化財保存活用大綱の中の県立郷土館の位置付けや青森県全体の文化財をこれからどのように保存・活用していくかという方向性に、現在の検討がどのようにリンクするのも聞きたい。

- 滋賀県立琵琶湖博物館では、琵琶湖の環境汚染という大きな課題を、いかに解決していくかということの中で博物館が建てられてきた歴史があると思う。そのことを踏まえ、青森県が解決したい問題について、企画する側の県立郷土館の職員に聞いてみたい。例えば、豪雪など様々あると思うが、青森県で暮らすことのイメージがどれだけ学芸員にあるのかによって、コンセプトや展示で使用する資料がもう少し具体的になると思う。

本日の資料では、コンセプトは分かってきたが、テーマがはっきりしないところもある。青森県で何を課題にして、県民と共有して解決し、あるいは未来に向かってつくり上げていきたいのかを聞きたい。

→ これまで学芸課の中でも、例えば少子化など青森県の課題解決を目指すべきといったことについても議論してきたところ。

そのような課題を前面に出すような活動や展示については、まとめ切れていないが、これからの博物館の活動として、県民と一緒に県の課題を解決していく姿勢が大事だと理解しており、今後も議論を続けていきたい。

- さきほど委員からビジョンの話があったが、このビジョンをかなえるのがコンセプトだと思うので、先にコンセプトが提示されていることに違和感がある。提示されたコンセプトは、青森県でなくても当てはまることに加え、青森県の宝物という表現が資料にあるが、これは他県に置き換えても通用するような内容だと思う。

もっと青森県らしさをビジョンやコンセプトとして打ち出していく必要がある。

個人的には、雪は青森県にとって一つの文化を形成する重要なものであり、それに付随して出てきた民俗芸能や祭り、農業などを青森県らしさとして打ち出し、もっと青森県を自慢できるようなコンセプト、ビジョンであるべき。

- MVVにおいて、ミッションは、「ともに考え、活動し、成長する博物館」や「湖と人間」のようなもので、バリューが具体的な展示手法であると考えするため、ビジョンのあるべき姿について、他館においても館内で議論されていると思う。特に三重県総合博物館は、三重構造の展示にしようとしたベースになる議論があったと思う。青森県は厳しい冬があり、自然、自然史、自然科学をベースに、そこから暮らしや食文化、祭礼など様々なものが出てきていることから、そのつながりを表現した方がよい。

本日の資料については、ミッションに当たる部分は第1回会議や第2回会議で大分議論しているので大体よいと思うが、例えば四季、自然をベースにした博物館や自然と人の暮らしといったビジョンとするのであれば、四季で表現するのが一番分かりやすいと思うが、展示手法などのバリューの議論をする前にビジョンの議論をすべき。

- 10万点以上の資料を持っているが、その中でも、世界や日本、県で認められているもの、指定されているものは特に重要であると認識している。そのことも踏まえ、新しい博物館として何をメインに展示していけばよいか、本日意見をいただきたい。
- めざす姿として「ふるさとをつなぎ未来をつくるミュージアム」としているが、この「ふるさとをつなぎ」の部分の解像度を上げたいと思う。ふるさとをつなぐとは、県内の地域間をつなぐというイメージなのか、それとも未来につなぐというイメージなのか、詳しく教えてほしい。
 - 両方考えていて、ふるさとなので、県内全域を網羅してつなぐ、それを未来へつなげていくというイメージである。
- 県内においても横の連携のつなぐも意識して、さらにそれを県外、未来にもつないでいくような抽象的に網羅したいという意図か。
 - そのように考えている。
- めざす姿の「ふるさとをつなぎ未来をつくるミュージアム」が、県内の地域どうしをつなぎ、それを青森県の魅力として未来に継承するという意味なのであれば、県立施設としての郷土館が地域の小規模博物館・美術館・資料館を束ねリードする中核機関という役割を担うことも必要なのではないか。

青森県は人口減少という大きな課題を抱えており、今後、地域の文化施設の継続はますます難しくなるだろう。県や大きい市であれば大丈夫だと思うが、小さな町村の博物館・美術館・資料館等の公共文化施設の維持は難しく、それらが保持する地域固有の文化資源の存続が危ぶまれる。「ふるさとをつなぐ」を掲げるのであれば、そういった町村の博物館との連携やサポートなどの機能を特色の一つに挙げることが、青森らしさにつながるのではないか。県の施設だからこそでできる役割であり、青森県の課題解決にもつながる先進的な取組になると思う。

- 県立郷土館の収蔵資料は10万点以上あり、世界や国、県で認められているも

のが特に重要であると説明があった。青森県の魅力はたくさんあることから、収蔵資料も魅力あるものがたくさんあることは理解できるが、県立郷土館の職員が考えている、その中でも一番打ち出していきたいものは何かお聞きしたい。

→ 現時点で一番を挙げることは難しいが、指定されているものは価値が認められており、先ほど紹介したカイギュウの化石も県内では初記録となっているなど様々あるので、現時点では絞り切れていない。

- 県立郷土館の中だけでこのような議論を深掘りすることが難しいと思うので、大学の関連する専門家と県立郷土館の学芸員とで、何をメインに展示していけばよいかといった議論のためのミーティングを実施してはどうか。もし必要があれば、大学側としても協力を惜しまないと思うので検討してほしい。

- 青森県らしさについて改めて考えた際に、青森県が生物が多様で自然に恵まれている理由は、県域が東西に、横長に広く、海に囲まれているからだと思う。

江戸時代に入ると津軽と南部に分かれて、対立のイメージも多いが、県のおおよそ中央を境に文化、政治的にも分かれていた。文化や生活、自然についても、雪は津軽は多いが、南部はそこまででもないといった状況がある。展示を考える際には、東西に、横に長い青森県ならではの地域性を前面に押し出していくと、新しい県立郷土館で青森県を丸ごと体験できることとなり、来館者の満足度やリピーターの増加にもつながっていくと思うため、展示の特色では、このような部分で青森県らしさを押し出すとよいと考える。

教育普及に関して、一般の来館者との距離が近く、かつ職員と来館者の間に入り、より近い意見を吸い上げることができる橋渡しになれる方がいるとよいと思う。

地域の中で、博物館に興味がある方を取り込む際に、他県では、ボランティアの導入も検討し、また、単に展示を学芸員に代わって説明する役割だけではなく、自然史系であれば標本やデータベースの作成、歴史系であれば古文書資料の撮影やデータベース作成、写真のデジタル化などをしてもらい、博物館の中に入って市民に近い意見を発信してもらう取組をしている例もあり、これらも踏まえた教育普及が必要だと思う。

- 教育普及について、資料にあるものは従来も取り組んでいるものだと思うので特段意見はないが、これまでの会議で県立郷土館の得意なところはどこかという質問に対して、四季を押し出した展示ができることや今回スライドで他館事例の特徴について説明があったが、いずれも県立郷土館の学芸員からのプレゼンテーションがほしい。

四季折々の展示例を4つ示されたが、もっとたくさんのもの中から、他館事例を踏まえて何を取り込んでいったらよいと思っているのか主体的な説明をお願いしたい。

また、わくわくルーム（仮称）とあるが、これはどのようなイメージで、他館ではどのような事例があって、それを青森県に置き換えた際に、どのような可能性があるのかを聞きたい。

→ わくわくルーム（仮称）については、こどもを含む様々な来館者に体験メニ

ュー等を示し、その中から選んでいただき、体験や学習ができる場所を想定している。

- 教育普及について、よく知っている側が教えるようなスタンスが見えてしまう。例えば、わくわくルームが幼児と児童に限られていて、知識がないことを前提に教えてあげるようなイメージを持ってしまう。

博物館は、県民、市民が知識を持ってきて、学芸員と一緒に育ててもよいはずである。そのような観点で見ると、現状ではよく知っている学芸員が知識を持って各地に回るようなイメージであるが、県民、市民に知識を持ってきてもらい、一緒に育てるといった、コミュニケーションを前面に押し出した教育普及のコンセプトを用意した方がいいのではないかな。

- 資料2、6ページの新しい県立郷土館のコンセプトの中で、展示・教育普及といった図が示されているが、「ダイナミック」という言葉が理解できなかった。また、見る・知る・学ぶが「静」で、体感する・活動する・発信するが「動」という表現をされているが、これも理解できない。見る・知る・学ぶ自体にも動的な要素もあり、それをどのような媒体でどのように発信するのかは技術的な問題であるため、それをつなぐ言葉はダイナミックではないと思う。

コミュニケーションの中で、それをどのように情報として伝え、共感し、共有して、その先の新しい知をみんなと一緒に生み出していくのかがこれからの博物館に求められている非常に重要な要素だと思う。

教育普及は、技術的には全ての人に開かれていくアクセシビリティや、ユニバーサル、技術的な開発、実証、導入については進んできているので、それを具体的に新しい県立郷土館の構想に取り入れていけば良くなっていく部分があると確信している。

また、自然環境から出てくるテーマは豊かにあり、それを動的な発信によりどのように県民と共有して、青森をどのようにしていきたいのかを一緒に考える行動拠点、ハブとしての機能が県立郷土館に求められている一番大切な役目だと思う。

県立郷土館としての目標、指針を改めて定め、それに対するアクションプランを中期的なものとその先にある将来的なビジョンを入れ込み、具体化してもらおうと、本検討会議の議論も面白くなると思う。

- 教育普及の根幹は、こどもたちでも大人でもよいが、自分たちのルーツ、アイデンティティの根底には何があるのかだと思う。アドバイザーの奈良岡氏からも話があったが、青森県は端に位置している県なので、江戸時代からの中央集権の体制の中で失われずに残ってきたものがたくさんあるが、それが今少しずつ失われている状況である。

県民が、まだ残っているものを価値として認めて、誇りにしていくための教育は青森県にしかできないと思う。豊かな自然や様々な生活文化、お祭りなど、昔ながらの価値が残っている文化や自然がたくさんあるため、それらに焦点を当てて、学術的なバックボーンを加えながら、こどもたちに伝えていく。それを世界に発信していくことが、県立郷土館の役割だと思うので、その中で教育普及もや

っていけばよい。

- 人材育成として、県立郷土館でずっと研究を続け、長く郷土館全体を把握することができる専門の学芸員を置いて育てることも重要だと思う。また、障がいのある方に向けた展示を手かかげている専門家から話を聞いてみてもよいのではないか。

- 県立郷土館の複数地域への整備については、現実性はかなり低いと思わざるを得ない一方で、青森県全域の地理的条件や県域の広さを考えると、これまで県立郷土館が出前授業や移動博物館に力を入れてきたことは、新たな県立郷土館の整備の中でも重要な柱になり得る取組だと思っている。

これからの整備方針を考えていく上で、青森県の特性と県立郷土館の教育普及のプログラムをどのようにリンクさせていくのかは非常に重要となると思う。

- 青森県について、ふるさととのかたちを見ていくというコンセプトを立てているが、国際的な観点での青森県の位置づけがあってもよいと思う。

ふるさとだけ見て、ふるさとを展示していく方法もあると思うが、例えば滋賀県立琵琶湖博物館では、コンセプトを「湖と人間」としており、琵琶湖と人間とはしていない。それはバイカル湖やタンザニーカの湖などでもよいということである。

その地で人がどのように生きているかということの中に、一度自分たちの生活を位置づけてみるという観点で教育や研究をしており、同じように青森県も位置づけ直したときに、自分たちが持っているものを改めて見直して世界に発信していく機会があると思う。

それは、展示で挙げられた四季とも違って個別の要素はあるが、これだけだと現状ですでに価値が認められている文化事象の追認にしかないと思うため、国際的な視野で青森県を位置付けることによって、県民がまだ意識していない文化の価値を新しく作っていくような観点を加えてほしい。

(3) 助言

- 展示に関して、知的・発達障がいのある方は、抽象的な概念や一度に多くの情報を処理することが難しい方が多いと言われているため、情報を具体的に視覚的に伝える工夫が求められる。

館内の案内表示や展示解説、配布物などは易しい日本語で、具体的でかつ簡潔な言葉を使うとすべての人に優しいと思う。漢字に振り仮名を付すのは基本であるが、外来語や専門用語は避け、「出土する」は「土の中から出てくる」、「収蔵する」は「大切にしまっておく」などのように簡単な言葉で表現するとわかりやすいと思う。

特に展示解説の文章は、たくさんの情報を詰め込まれたり、文の構造が複雑になる可能性もあるので、一文を短くする、箇条書きにすることも分かりやすさにつながる。

このほか、視覚的な支援も合わせて、ギャラリートークでは、話す内容に合わせて関連する写真やイラスト、実物を見せて説明したり、ワークショップの場面

などでは、活動の流れが分かるイラストや写真で示した手順書を備えたりすると見通しを立てることにつながり、利用者は安心して参加できると思う。

受付や案内カウンターには、コミュニケーションボードなどがあると、言いにくいことをボードの中のもので示すことができ、1人で来館した人にとっても有効な手段になる。

また、縄文土器のレプリカで触れる、臭いを嗅ぐ、祭りの音や鳥の声を聞くといった五感をフル活用したプログラムを取り入れることも、興味や関心を引き出すことにつながる。

- 来館前の準備として、見通しを立てることが重要で、来館から退館までの流れを写真や簡単な言葉で説明したソーシャルストーリーなどをホームページやパンフレットに掲載することによって、受付や展示室、トイレの場所、休憩スペースなど事前に館内の様子が分かり、自身の行動の流れを知ることができて、初めての場所への不安を軽減する効果があると思う。
- 自閉症や発達障がいのある方に有効な手段として、クールダウンスペースといった静かで落ち着けるような場所、空間を設置すること、カームダウンスペースといった感覚過敏によるストレスの軽減、音や光が苦手な方々のパニックの回避につながるようなスペースを設置することが挙げられる。このようなスペースを予約なしで、休憩したいときに誰でも利用できると、感覚過敏の方だけでなく、パニック障がいや精神疾患のある方にも効果が期待され、今回の大阪万博や博物館、空港などでも取り入れているところが多くなってきていると聞いている。

トイレの表示や順路、休憩スペースの案内表示は、文字だけでなく、ピクトグラムなどを使って大きく表示されると分かりやすいと思う。デザイン性ももちろん重要であると思うが、分かりやすさを重視してほしい。また、順路を色分けするなど直感的に理解できて迷いにくい工夫をする、順路の途中で疲れた際にどこでも休憩できるような椅子を多めに置くなども有効である。また展示を見て飽きた場合に順路から抜け出せるような工夫もあるとよい。

ハード面以外にも、このような取組を行うに当たって職員全員の理解が重要になる。なぜこのようなことをしなくてはいけないのか、何に困っているのかなどを理解しないと、形だけの取組で終わってしまう恐れがある。合理的配慮の理念を共有する必要があることから、ボランティアを含む全職員に対して障がい特性に関する研修を定期的実施することやそれに応じたコミュニケーション方法を学ぶ機会を設けて、個別のニーズに柔軟に対応できる体制を構築してほしい。

- 青森県の自然環境は、環境の多様性が非常に高く、このことが食文化や生活文化の多様性を生み出していることにつながっている。その多様性が高い要因の例として、県の周りを日本海、太平洋、津軽海峡、陸奥湾を含め4つの海で囲まれていることが挙げられる。他県にはあまり例がなく、日本海と太平洋に接しているという部分でも食生活や自然環境の多様性を生んでいる。

日本で初めて世界自然遺産に指定されたのが白神山地であり、当時全国で2つだけで、今でも5つしかない。また、ラムサール条約湿地では、54か所のうち青森県に1か所、三沢市の仏沼が指定され、このような世界的な条約で指定され

た場所が2か所ある。

国立公園は、全国35か所のうち本県は2つ、国定公園も58か所のうちの2つが本県にある。そのほかにも湖だったり、普段あまり気づくことが出来ないが、河川環境の多様性が非常に高い。

岩木川、馬淵川が有名であるが、青森県は約70%が海に接しているので、それぞれの小河川がたくさんあり、淡水性の生物の多様性が非常に高く、それが生物の多様性を生んでいる。また日本海と太平洋に接していることから北海道に行く渡り鳥は青森県を全て通っていくので、鳥類の多様性も非常に高い。

その中で、岩木山麓で、絶滅危惧ⅠBのイヌワシが飛んでいて、冬場はオジロワシや、オオワシ、国の天然記念物に指定されている鳥類が普通に飛んでいる。

3月、4月になると渡り鳥でマガンという天然記念物も、約20万羽、本州に飛来しているが、そのほとんどが青森県を通っていく。そのほかにも、最近はハクガン、シジュウカラガン、コクガンというガン類の天然記念物も、ほぼ青森県を通っていく環境であるが、県民にあまり知られていないことから、それらを是非展示の中に盛り込んでほしい。

淡水性の生物で一番注目しているのはニホンザリガニで、青森県の固有のザリガニはニホンザリガニしかいない。20年近く調査している中で、目の前で絶滅していて、それを保全する活動が全くされていない。県全体として、あるいは行政として、目の前で絶滅していく生物を守る活動が必要だと感じる。

高校の教員時代は、授業の中でビオトープ学という独自の授業で保全等への理解を促してきたが、これを組織的な取組として行ってほしい。また、保全活動により増殖や改善状況を展示として表現してもよいと思う。

- 教育普及については、ワークショップでは、一方的に説明を聞くだけではなく、参加者が主体的に関わって、最終的に成果物を持って帰れる取組があると、家族や友達に楽しさを伝えられるので、そのようなプログラムを検討してほしい。

また、視覚的なサポートとして、音声ガイドシステムやタブレットなどを取り入れ、企画段階から様々な障がいのある方に参加してもらい、どうすれば来やすくなるかなどを一緒に考えて作り上げていってもらえるとよい。

- 現在、全県立高校ではあおもり創造学に取り組んでおり、その授業は、地域の財産や自然環境など、生徒が個々にテーマを見つけて取り組んでいることから、そこにアプローチすることで裾野が広がっていく可能性もある。

全県立高校でそのテーマが数百あるが、実際に地元の自然環境をテーマとして取り上げた高校は2、3校しかなかった。県全域で教員が異動することからも、地域の文化や自然を教材として取り入れる教員が少なく、地域とのつながりが無いことや、高校を地域が支える仕組みがないことにより、学習機会が減少している。そういったことから、あおもり創造学をきっかけに、是非地域と密接に関わった取組を高校だけでなく、小学校、中学校でも進めてもらえると自然環境の分野でも裾野が広がっていくと思う。

4 閉会

議長から、本日の意見を基に中間まとめに向けた資料を作成を作成するよう、県に対して依頼があった。

また、議長が次回会議に出席できないため、設置要綱の第3の第5項に基づき、議長から葉山委員を議長代理として指名した。